

「日本政治の課題と展望 参院選結果、石破退陣を受けて」

＜参院選結果をどう見るか＞

●四半世紀に及んだ自公与党システムの崩壊

◇2025参院 自民39(52) + 公明8(14) = 47 = 自公過半数・必達50 - 3

◇2024衆院 自民191(256) + 公明24(32) = 215 = 自公過半数233 - 18◇55年体制崩壊に次ぐ日本政治の構造変化 1989年参院選「山が動いた」→1993年衆院選自民過半数割れによる細川護熙非自民連立政権の誕生→衆参両院での過半数維持不可・連立時代(非自民→自社さ)→1999年小渕恵三自公連立政権(98年小渕参院少数与党政権発足→国会運営苦慮・問責決議→野中官房長官「土下座してでも」と自民・自由連立→竹下登が創価学会要路と折衝)

◇自公連立の政治力学

・自民 過半数へ議席補填 政局安定 選挙協力メリット(1選挙区、3万票の下駄) ・公明 もともと与党志向(現世利益) 閣僚効果(04年以降国土交通大臣占有) 池田名誉会長防衛(証人喚問攻勢で自民に畏怖) 選挙メリット(自民後援会名簿ゲットで比例区フレンド票拡大)

◇自公崩壊の政治力学

・自民 過度な公明依存 後援会縮小による足腰弱体化 人材劣化(三角大福中→安竹宮→麻垣康三→?) 小泉・安倍時代は一時的に盛り返し
・公明 創価学会組織の高齢化 世代交代停滞 カリスマ池田名誉会長死去(比例票の推移 25年52.1万 24年59.6万 22年61.8万 21年71.1万 19年75.7万…05年89.8万)

●自国ファースト勢力の台頭

◇参政党旋風どう読むか

・いきなりジャンプの14議席(選挙区7 + 比例7) 比例74.2万(12.5%)は野党2位(国民76.2万、立憲73.9万)←24年衆院選では18.7万(3.4%)で3議席←22年参院選で比例17.6万(3.33%)で1議席

・日本新党 1992年5月結党 7月参院選4議席 93年衆院選35人当選(ポスト冷戦の時代背景 細川護熙という血統)

・なぜ伸びた ①「日本人ファースト」というワーディングの魅力、魔力 公約では「望ましくない迷惑外国人などを排除」②自民離れ(安倍支持)票の受け皿化③組織力(地方議員150人) + SNSパワーの地力

・背景に先進資本主義国共通のトレンド(格差拡大→外国人排除) 仏の24年7月総選挙第1回投票で右翼「国民連合(RN)」がトップ 独の2月総選挙でAfD(ドイツのための選択肢)が第二党に躍進 英の5月の地方選で移民対策の強化を掲げる右派ポピュリス

ト政党「リフォームUK」が躍進 米国ではトランプの米国ファースト政権

・党首は神谷宗幣 77 年 10 月生まれ 07 年から吹田市議 2 期 6 年 10 年に「龍馬プロジェクト」会長 15 年大阪府議選に無所属で立候補し落選 20 年に発起人として参政党を設立・ナショナルとナチュラル（日本の伝統的な家族観や歴史神話教育を重視 反ワクチン 自然食重視）＋元共産党＋元幸福実現党＋α

◇各党右に倣え公約現象

- ・自民 「仮放免外国人への対応を強化、違法外国人ゼロの取り組みを加速」
- ・国民民主 「外国人に対して適用される諸制度の運用の適正化」
- ・維新 「外国人比率の上昇抑制や受け入れ総量規制を含む人口戦略を策定」

●既成左翼政党の溶融

◇社民党ラサール 1 議席

◇共産党半減の危機（3←7）

●立憲民主の足踏み（22←22） 野党第一党効果見えず 「悪夢」評覆せず 高座甘受→戦闘能力低下

●底流から見えるもの

◇「自公＋1～3」時代の始まり

◇既成政党に対する忌避感

◇国民世論のトータルな保守化・右傾化・排外化

◇SNS の選挙媒体力再確認（都知事・兵庫県知事選→参政党）

<石破退陣の背景とポスト石破の行方>

●なぜ退陣

・数で敗退 自民党総裁選前倒し規定（党則第 6 条第 4 項）＝自民党全国会議員＋47 都道府県連の過半数（今回は 172 人）の要求があった場合臨時総裁選実施 森喜朗居座り政局後に追加 記名縛りが逆に反発 過半数超の勢い

・戦略で敗退 石破政権とは世論が生んだ政権（4 度党内基盤で敗退、5 度目に「裏金」イメージ解消期待で勝利） 国民世論の高支持率 v s 党内世論の低支持率（党内基盤の弱さ）の綱引きによる政局運営 過去の政権で言えば三木武夫、海部俊樹、小泉純一郎型 最終兵器としての衆院解散権の効果的運用（自民党内の低支持率を国民の高支持率によって解消）の可否 三木も海部も解散できず 小泉だけが郵政解散でブレイクスルー その成功要因（シングルイシューへの絞り込み 劇場型政治） 石破（あれもこれも ネクラ政治）

・非力で敗退 国民世論に胡坐 党内基盤強化努力不足 派閥水月会 20 人の大半が離反 反目 側近は皆外様 唯一の譜代赤沢亮正への過度な負担（政策も政局も）

・二世の脆さで敗退 「自民に亀裂」「割れる」の説得で白旗 最後は自民党内での生き残りを選択

●その意味

・最後の保守本流政権の終焉 保守本流（石橋湛山、吉田茂源流→大平正芳、宮澤喜一、加藤紘一 戦争への反省が原点 戦後体制擁護 言論配慮 生活重視的）v s 自民党本流（岸信介→清和会→安倍晋三 戦争の部分擁護 言論より統治 安保重視的）

・安倍政治修正役の不在 疑似政権交代の不全 異次元金融緩和→「金利を上げられない資本主義経済」 日米同盟一体化→「米国の駒としての中国との望まぬ対立」

●どうなるポスト石破

◇フル方式（9月22日公示 10月4日投開票）

・高市早苗 小泉進次郎 林芳正 茂木敏充 小林鷹之らが名乗り（へ）

・見立て1 高市 v s 小泉の争い 高市に党員票集まるが、決選投票で小泉逆転

・見立て2 林が善戦 林・小泉の一本化で林総裁

・見立て3 それぞれに参加に意義 総裁選後の人事狙い

◆2024年9月27日（第一回）

①高市早苗 1 8 1 （72+109）

②石破茂 1 5 4 （46+108）

③小泉進次郎 1 3 6 （75+61）

④林芳正 65 （38+27）

⑤小林鷹之 60 （41+19）

⑥茂木敏充 47 （34+13）

⑦上川陽子 40 （23+17）

⑧河野太郎 30 （22+8）

⑨加藤勝信 22 （16+6）

◆決選投票

①石破茂 2 1 5 （189+26）

②高市早苗 1 9 4 （173+21）

●どうなる他党

・公明 存亡の危機 福祉・平和回帰

・立憲 安住幹事長 リベラル、若手登用

・維新 共同代表が前原誠司から藤田文武に 自民右派として原点回帰

●どうなる少数与党

◇どこでどこ「+1」を実現？

◇連立優先順位①維新②国民民主③立憲

◇首班指名選挙の罫 自民党総裁が首相になれない可能性

◇連立拡大の壁 秋の臨時国会では困難？

◇今後の政治日程

- 9月中下旬 国連総会には石破出席、演説（日米首脳会談）
- 10月上中旬 臨時国会召集、首班指名選挙で首相選任、補正予算提出
- 10月13日 大阪・関西万博閉幕
- 10月28日 安倍氏銃撃犯山上徹也被告初公判（奈良地裁）
- 11月15日 自民結党70年
- 12月中旬 自民税制大綱決定
- 12月下旬 政府が26年度予算案決定

<日本の課題>

●外交・安保政策（世界史における日本の役割は何か？）

◇北東アジアでの戦争（台湾有事 米中戦争 北朝鮮発の戦争）回避に全力 アジアダイナミズムを反映した開かれた交易・文化交流ゾーンに

◇日米関係の再設計

- ・トランプ政権下・ジャパンハズ解体を機に米国への過剰依存、過剰付度の適正化
- ・両国の国益の整理 覇権国争いの勝者になるため中国を包囲（戦争シミュレーション）、その最強の駒として日本を活用したい米国 v s 過去の侵略の歴史を背負いながら巨大市場・産業を持つ一衣帯水の隣国として平和共存したい日本
- ・米軍基地総体を再検証・段階的縮小 地位協定改定 非核平和主義の推進 多国間安全保障の仕組み作り

◇日中関係仕切り直し

- ・過去の4文書再確認（内政不干渉、平和共存、戦略的互惠関係、日本による深い反省と心からのお詫び、環境エネルギー分野での協力）
- ・首脳同士のシャトル外交復活 第5の文書

◇領土問題の解消

- ・尖閣の日中共同開発化（福田康夫政権時代に立ち戻り）
- ・北方領土への再挑戦（地位協定改定による対米拒否権行使でロシアと対等交渉）

●経済・財政政策（食い扶持作りと経済のバランス回復）

◇TPP拡大主導 アジア太平洋地域の自由経済圏拡大（台湾、中国、英国加入促進）

◇ポスト自動車産業は？医療・防災の基軸産業化など

◇異次元緩和の時間をかけた正常化 後遺症（日銀財務悪化 財政規律の喪失 市場機能の低下）対応しながらマクロ政策の再構築

◇第二の「税と社会保障の一体改革」実現